

大倉 恭輔 准教授



さよならだけが人生ならば - 退職にあたって -

長い入院生活（＝大学院生時代）の果て、ご縁あって本学に着任したのはさていつのことだったやら。

当時の「生活文化学科」は家政系学科からの脱却を企図し、さまざまな改革に着手しているところだった。同時に、18歳人口増加のピークの中にあり、臨時定員増によって、必修科目は200名収容の教室に学生があふれてしまうという、今となっては夢のような状態であった。（教室につめ込むために、小さい椅子と机を特注したと聞いたが本当だろうか）

そうした状況からスタートした教員生活に思い出は尽きないが、あえてここでは授業とは別のふたつの活動について記したい。

ひとつは、学生に学内誌の発行をさせたことである。パソコンもネットワークも一般的でない時代のこと。ワープロソフトの使い方から始め、企画の立て方・取材先へのマナー・原稿の添削など、細々と指導していった。また、広告出稿はとらず、制作実費の多くは自腹を切った。（事情を知った先生方からのカンパはありがたかった）

おかげで、全学の在籍者数が1200名近くいた時点で、5-600部を配布し残部なし。何より、構内に捨てられているところを見たことがないのは、当時の学生スタッフたちの努力の賜物である。

もうひとつは学会活動である。新しい小さな学会に関わるうち、本学で大会を開催という話

になった。本学の宣伝になるならと、何もわからぬまま兎にも角にも乗り切ったのは奇跡のような話である。その流れで、他大学での大会においても実行委員となったり学会理事に選出されたり、学会誌の立ち上げに携わるという得難い体験にも恵まれた。

これらの本来の学務・公務以外での活動をおこないえたのは、本学および同僚の先生方や職員の皆様のご支援があったにほかならない。まことに感謝の念に堪えない。

加えて、ここ数年の体調不良などのためにボンコツ化した小生を支えていただいた助手各位には、別記してお礼を申しあげる次第である。

井伏鱒二の「サヨナラダケガジンセイダ」という歌に対して、寺山修司は「さよならだけが人生ならば、また来る春はなんだろう」と問い返した。

思うに、教員という仕事は、卒業生の数だけの「さよなら」を繰り返し体験する特殊な職業である。しかし同時に、4月になれば入学者の数だけの「出会い」に恵まれる職業でもある。現職の先生方には、あらたな希望に満ちた出会いに恵まれることを祈念して、老兵は去っていくこととする。

略歴

- 1954 年 東京都生まれ
- 1979 年 和光大学人文学部人間関係学科卒業
- 1979 年 早稲田大学大学院文学研究科研究生（心理学専攻）
- 1982 年 成城大学大学院文学研究科修士課程（コミュニケーション学専攻）
- 1985 年 成城大学大学院文学研究科博士課程（コミュニケーション学専攻）
- 1991 年 成城大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学
- 1993 年 実践女子短期大学生活文化学科（後に生活福祉学科）着任
- 2014 年 実践女子大学短期大学部英語コミュニケーション学科 移籍

この間、パン・スクール・オブ・ミュージック・武蔵野女子大学短期大学部などで非常勤講師

主な共著書・論文

I 著書

- 1983 年 お母さん、チャンスを逃さないで（共著）ブレーン出版
- 2008 年 関係力トレーニング（共著）遊戯社

II 論文

- 1984 年 子どもの読書鑑賞態度と音楽鑑賞態度 読書科学 vol.31 no.4
- 1990 年 青年女子の身体知識に関する研究（共著）思春期学 vol.8 no.2
- 2006 年 地域メディアにおける生活情報の交換について－井戸端としてのインターネット－
実践女子短期大学紀要 vol.27
- 2018 年 日本の吹奏楽専門誌における特集記事の内容分析 実践女子大学短期大学部紀要 vol.39
- 2022 年 深夜放送におけるムード番組の消失 Jissen English Communication vol.50